

上代タノの米英留学

—大正期における女子高等教育と海外留学の意義—

島 田 法 子

はじめに

この論考は、第6代日本女子大学学長であった上代タノ（1886–1982）の留学の記録であり、留学経験が教育者としての上代に与えた意義を考察し、日本女子大学校にもたらした影響を分析することを目的とする¹⁾。さらに、大正期における日本の女子高等教育における海外留学の意義についても考察したい。上代の留学は、日本女子大学校を含めて専門学校レベルにあった当時の女子高等教育の限界と海外留学の意義をよく伝えている。上代が留学に旅立った頃の日本の女子高等教育の状況を、中畠邦は「大正二 [1913] 年、東北帝国大学がはじめて理学部に女子三名を合格させ、文部官僚を困惑させ、ジャーナリズムでも取り上げられたが、あとに続く学生は少なく、[女子大学] 不要論の理由とされた。それは高等教育が特別な限られた人々にのみ可能であったからに他ならない。」と論じている²⁾。当時の日本では、女性にとって男子系大学での大学教育はほとんど手の届かないものであり、ましてや大学院教育を受けることは不可能に近かった。

上代は大学・大学院教育を求めて2度にわたって留学し、教育者としての基盤を築いた。初回は1913–17（大正2–6）年、アメリカ合衆国のウェルズ・カレッジへの、2度目は1924–27（大正13–昭和2）年のミシガン大学とイギリスのケンブリッジ大学への留学である³⁾。

1. ウェルズ・カレッジへの留学

1-1 新渡戸稲造とウェルズ・カレッジへの道

ウェルズ・カレッジは、ニューヨーク州北西部に散在する氷河湖ひとつ、カユガ湖のほとりにあるオーロラという町にある小規模な名門女子大学である。かつて上代が学長時代には、日本女子大学の姉妹大学でもあった。キャンパスは湖に向かってゆったりと下る斜面に広がっており、その奥のほうに図書館がある。図書館の2階に上がると、ガラスケースに入った大きな日本人形が展示されている。1933年のクリスマスに、日本女子大学校の学生がウェルズ・カレッジの学生に贈ったもので、この人形こそ、上代留学に始まるウェルズ・カレッジと日本女子大学との友好の象徴であった。

上代は1910年3月、第7回生として日本女子大学校の英文学部を卒業すると、4月から同学部

予科で英語を教えることになった（当時の高等女学校における英語教育は十分とは言えず、英文学部の授業についていくだけの英語力を持っていない学生は、1、2年間予科に籍をおき英語力の向上に全力をかたむけた）。また校長成瀬仁蔵が、新渡戸稲造や浮田和民の協力を得て、英語雑誌『ライフ・エンド・ライト』（*Life and Light*）を発行し始めたときにあたり、成瀬校長に英語力をかわれて、上代はその編集をまかされることになった。同時に、井上秀、大橋広とともに日本女子大学校の将来を托すべき卒業生の一人として深く信頼され、成瀬校長の私設秘書のような立場で校務を手伝ったり、春秋寮の寮監を勤めたり、母校の教育全般に携わるようになった⁴⁾。

上代は天性の教育者で、教鞭を執ることを非常に楽しんだ。しかし、向学心旺盛な上代は現状に飽き足らず、さらに進学したいと思っていた。後年、聴講生としてでもよいから東京帝国大学に進みたかった、と本音を吐露している。上代は学生時代から東京帝国大学教授であった新渡戸の自宅を頻繁に訪問するようになり、新渡戸門下生の鶴見祐輔、田島道治、前田多門等とも親しくなっていたこともあり、東京帝大に憧れたのは自然の成り行きであったろう。しかし当時は大学の門は女性に対して堅く閉じられていた⁵⁾。女性に残された学問の道は海外留学であった。

上代にアメリカ留学の道を拓いてくれたのは、新渡戸であった。上代は、1912年、たまたま交換教授としてアメリカの諸大学を巡回講演していた新渡戸のもとに、アメリカに留学したいと手紙を書いたのである。まもなく新渡戸の斡旋で、ウェルズ・カレッジから特別の奨学金が授与され、入学が許可された⁶⁾。1913年夏、念願かなって上代はアメリカに出発した。27歳であった。最初はウェルズ・カレッジ英文学科の1年生として入学した。日本女子大学校の教育が専門学校あるいは短期大学のレベルとみなされたためか、初年度は学部の1学生として教養科目を多く履修している。2年目からは特別生として登録され、学部の3・4年生と共に授業を受けつつ大学院生としての訓練を受け、4年目には修士論文の作成に力を入れ、1917年7月に修士の学位を取得して帰国した。女性が英文学専攻で修士の学位を取得することは、日本では考えられないことであった。上代は帰国すると、すぐに母校の英文学部教授になった。留学経験を基にその後の上代の活動が展開されていく。留学によって何がもたらされたか、3つの影響を指摘できる。

1-2 カリキュラムの変革

上代がウェルズ・カレッジで学んだことは、帰国後に日本女子大学校のカリキュラムに変革をもたらすことになった。上代が4年間の留学期間にウェルズ・カレッジでどのような科目を履修したのか、同女子大学に保管されている上代の成績記録によって知ることが出来る。上代の記録には、まず“Jodai, Hilda Tano: Tokyo, Japan. / Terms of Admission: Special Student. / Date of Entrance: Sept., 1913. / Date of Withdrawal: M. A. June, 1917.”と記され、4年間に履修した科目名が記されている。科目名を見ただけでは、上代がどのようなことを学んだのか、内容までは知ることが出来ない。しかし、大学のアーカイヴズに納められている1913年度の履修便覧 *Wells College Catalogue* の科目紹介によって、教育内容の概略を知ることができる。上代は、初年度は学部の1年生とともにリベラル・アーツ教育を受講している。当時の日本における英語教育のレベルでは、アメリカの大学で授業についていくことは容易ではなく、最初の1年はいわば助走期間であったといえよう。2年目以降には、19世紀イギリス文学を中心に受講している。また文学以外に西洋史や西洋哲学を履修しており、文学研究に深みを持たせようとする配慮がみられる。ま

た文章作成法、論文作成法などの書く訓練と、文学理論や文芸評論など文学研究方法の修得に重点を置いていたことがわかる。ウェルズ・カレッジの英文学科の科目にはアメリカ史、アメリカ文学が開講されていた。これは日本の大学ではまだ開講されていない目新しい科目で、上代にとってこの2科目が将来大きな意義をもつものとなる。

アメリカ帰りの上代は、英文学部カリキュラムに新しいアメリカの風を吹きこんだ。すなわち、「日本で最初のアメリカ文学史の講座」を開講したのである。「当時は、どこの大学でもアメリカ文学は英文学のつけたしとして扱われていたにすぎなかった」⁷⁾。上代はアメリカ文学講座を開設したことを誇りに思っており、「いまでこそ米文学講座はどこの大学にもあるが、当時は英文学だけで米文学講座はなく日本女子大が初めてであった。早稲田大学からは総長大隈重信のアドバイスで教授や学生たちが目白の豊坂をのぼって日本女子大のその講座をのぞき、洋書なども借りにきていた」と語っている⁸⁾。ウェルズの同窓会ニュースも「彼女が1917年にウェルズから日本女子大学校の教授として戻ったとき、日本女子大学校において日本で最初のアメリカ文学とアメリカ史の科目を導入した功績があることを知って、我々は誇りに思う。他の大学でも1932年には開講するようになった」と伝えている⁹⁾。

もう一つの上代がもたらしたカリキュラム上の改革は、「時事英語」を教え始めたことである。そのきっかけは、1919年新渡戸が国際連盟の事務次長に就任したことに感激した上代が、国際連盟を中心に世界政治の動きを教えるようになったことにある。上代はスイスの新渡戸から送られてくる国際連盟関係の英文資料を教材として用いた。「教室では“The League of Nations”をテキストに使ったり、ヨーロッパ連邦に関する論文が英文和訳の教材になったりした。」¹⁰⁾さらに上代の念頭にあったのは、ウェルズ・カレッジで見聞した時事英語の授業であった。上代は、「米国では時事英語を重んじているが、その学科内容は、時事問題を検討論争しつつ、問題の認識を正確にし、深めてゆくことである。[自分は]米国でこれを体験してきたと述べ、また「ロシヤ革命の起った当時は政治経済、社会情勢に急激な変動が起りつつあったがこの現実を学生に認識させ、日本の現状を把握させる必要がある。特に英米の情勢変動を比較検討して、両国の直面している問題を認識させることは、日本の学生に不可欠だと考えられた」と述べている¹¹⁾。英文学部の学生の国際化を強調するという見識は、留学によって世界に視野を開かれた上代ならではのものではあった。

1-3 新しい女性像

上代の留学は、女性の地位に関しても上代の目を開く経験となった。上代は「新しい女性観」を持つようになった。まず外見的には、帰国後も上代は当時の日本ではまだ珍しい洋装と断髪を続け、新しい女性のイメージで学生の人気を集めた。「学生たちは[上代先生の]のスマートな洋装と目新しい髪型にあこがれたという。当時は前髪に芯を入れて大きくふくらませるのが普通だったのだが、先生はただ7:3に分けただけの髪型だった」からである¹²⁾。1917年9月の『家庭週報』には、卒業ガウン姿の颯爽とした上代の写真付きで、帰朝報告記事が掲載されている。また1921年10月の『家庭週報』には、井上秀の渡米壮行会の記事が写真付きで掲載されているが、上代は一人洋装で写っている。

しかし上代が学生に伝えたかった「新しい女性像」は、決して外見ではなかった。『家庭週報』

に掲載された帰朝報告の中で、アメリカ女性の活発な社会参加について以下のように紹介している。「米国婦人の活動の如きは戦争参加以前から実に素晴らしいものでした。私が4年間観察しまして米婦人から受けた教訓は要するに統一された生活といふことであります。…内的生命の根が真に人格の内に潜み、それが外部〔社会活動〕に向って表はれているといふことでありました」と¹³⁾。そして翌1918年には、『家庭週報』にアメリカの女性参政権運動を紹介する一文を寄稿している。上代は、ウェルズ滞在中にこの問題に関心をもつようになり、賛否両論様々な演説を聞く機会を持つようになった。女性参政権運動のパイオニアでイギリスから訪米中のエメリン・パンクハーストや、アメリカの女性参政権運動の指導者スーザン・B・アンソニーの演説会にも出席した。上代は、参政権運動の論拠を8項目にわたり紹介している。ここでは2項目だけを挙げておこう。アメリカ女性たちは、女性の政治参加は家庭崩壊を招くという意見に対して、「婦人が一般国民の幸福慈善博愛事業に興味と責任とを感ずる事は、婦人が常に自身の精神的使命に生きて、家庭の責任をより深く感じ一層奮励する助けともなる」と主張。また参政権をもつと女性らしい優美さを失うという意見に対しては、「今日の〔アメリカ〕婦人は決して弱者呼ばれを快しとしない。そして自分の実力と相当な権利と責任とを要求して行く。即ち弱者として保護を受け、自らの安逸を貪る事は、相当の自尊心と判断力とを持った婦人には堪へ得られない事である」と主張している、と紹介。そして最後に上代は、「米国婦人投票権獲得は多分近き将来にあることと思ひます」と予測している（2年後、アメリカ女性は憲法改正を勝ち取り、全面的に参政権を手に入れる）¹⁴⁾。上代は、アメリカ女性の参政権運動とその主張を日本女子大学の学生・卒業生に紹介して、彼女たちの社会性、独立心の向上を促そうとしたのであろう。

1-4 日本女子大学の国際化と姉妹校

上代のアメリカ留学がもたらした成果は、これだけにとどまらなかった。上代のウェルズ・カレッジとの繋がり、そして若き学友たちとの生涯に及ぶ友情は戦後まで続き、日本女子大学に大きな収穫をもたらすことになった。上代はウェルズ・カレッジの『卒業生ニュース』(*Alumnae News*) にときどき顔を出し、また卒業後4回もウェルズ・カレッジを訪問している。また上代は卒業後しばしば日本関係の本をウェルズ・カレッジに寄贈し、1932年にはウェルズ・カレッジのファイ・ベータ・カッパ (Phi Beta Kappa) の創設メンバーに推薦され¹⁵⁾、戦後に日本女子大学はウェルズ・カレッジと姉妹校関係になる。

上代の回想によると、「そのとき私が出会ったあの親愛なる新入生全員が私のクラスメートになった。…彼女たちは私よりずっと年齢が下であったが、とても大人で落ち着き払っているようにみえた。私は彼女たちから多くを学んだ。また私は幸いにある種フリーランスの立場だったので、他の学年の学生たちとも混じることができた。彼女らはつねに大変親切だった。実に私は小規模大学のあらゆる利点を享受した」ということである¹⁶⁾。なかでも、寮で向いの部屋だった上級生、ロザモンド・クラーク (1915年卒) はよく気の合う友人となった。彼女は上代の要請で、1929-1930年、さらに戦後1948-1951年、1954-1959年の3回にわたって来日し、日本女子大学英文学科の教壇に立ち、英作文、英文法、英国史などを教えた¹⁷⁾。二人は、同じクエーカー派の信徒ということもあり、クラークが昭和1969年に没するまで生涯にわたる親友であった。

戦争が勃発すると上代とウェルズ・カレッジの関係はしばらく途絶えた。しかしながら、戦争

上代タノの米英留学

中でさえ、ウェルズ・カレッジは上代を忘れていなかったのである。クラークのリーダーシップのもと、ウェルズ・カレッジ同窓会は、強制収容所から出てくる日系二世の学生のために奨学金募金運動を行い、その奨学金を「上代タノ奨学基金」と名付けた¹⁸⁾。また戦争が終結し、日本の惨状と物資不足が報道されると、ウェルズ・カレッジ同窓会は続々と救援物資の小包を上代に送ってきた。ウェルズ・カレッジのアーカイヴズには上代からの礼状が8通も残っている¹⁹⁾。

上代は1956年4月、69歳で日本女子大学学長に就任したが、上代の学長就任のニュースに、ウェルズ・カレッジは沸いた²⁰⁾。同年6月、上代はヨーロッパ、アメリカの大学教育事情を視察に出発し、8月にはイギリスのバーミンガム市で開催された婦人国際平和自由連盟（WILPF）総会に第二次世界大戦後初めて日本代表として出席し²¹⁾、帰路アメリカのスミス、ウェルズリー、マウントホリオークなどの女子大学を視察し、10月に帰国した。アメリカ滞在中、ウェルズ・カレッジ訪問のチャンスを得た上代は、ウェルズからの諸々の援助に感謝をこめて多額の寄付を置いて帰った。ウェルズ・カレッジの『卒業生ニュース』の10月号は、上代の訪問を写真入で伝えている。

…彼女は、ロチェスターからシラキュースに行く途上で17年卒業のフレデリカ・サマーヘイズと共にオーロラに立ち寄った。…我々は、ミス上代が最近日本女子大学の学長になられたお祝いを直接述べる機会を喜んでいる。しかし1949年以来初めてのウェルズ訪問が、あまりにも短くて、我々の高名な卒業生を歓迎するレセプションを開催できなかったことは残念である。彼女のウェルズにおける日々のことや、それ以降日本の傑出した教育者の1人として行ってきたことについて、彼女と話をする特権を学生たちが持てたらよかったのと思う。…彼女は去るときに、「私のすべてはウェルズのおかげです」と述べて、同窓生基金に多額の寄付を置いていった。²²⁾

その資金は、ウェルズにおいて日本文化の研究を進めるために使われることになり、さらにウェルズ・カレッジと同窓会は、返礼として、日本女子大学の学生がアメリカ文化を理解するための講演や本などのための資金を寄付した。こうして2つの女子大間の交流が始まったのである。

翌年秋、上代の働きかけで、日本女子大学とウェルズ・カレッジとは姉妹校関係を締結した²³⁾。その具体的な成果として、日本女子大学には「日本女子大学・ウェルズ講座」が設けられた。このプログラムでは「相互に関する知識の交流は、豊に靈感をあたえ、学生の心と関心を広げるのに大いに力があるもの」と定義された。日本ではウェルズ・カレッジから講師を招いてアメリカ文化講演会が開催されるようになった²⁴⁾。クラークによるアメリカ文化諸相に関する連続講演会が全校学生を対象に開催された。またウェルズ・カレッジにおいては、外部から講師を招いて、日本文化に関する連続講演会が開催された。現在の姉妹校関係のような学生の相互留学はなかったが、しかしウェルズ・カレッジこそ日本女子大学の最初の海外姉妹大学であった。

2. ミシガン大学とケンブリッジ大学への留学

2-1 新渡戸稲造とバーバー奨学金

2度目の留学に眼を転じよう。ウェルズ留学から7年後、1924年に上代は2度目のアメリカ留学に発った。今回は、第1次世界大戦後、ジュネーブの国際連盟の事務次長として赴任していた新渡戸のほうから、上代に博士号に挑戦するように留学の話をもちかけてきた。上代は、二代目校長麻生正蔵に相談したところ、日本女子大学は、前年襲った関東大震災で復興整備に手間取り、校舎復旧もままならない状態だったため、麻生校長は「東京にいては何もできない。いっそのこと、しばらくの間アメリカで勉強してきては」と快く許可したという²⁵⁾。そこで新渡戸は、ミシガン大学に設置されていたアジア女性のためのバーバー奨学金に上代を推薦したのである。

バーバー奨学金は、大学院教育を願うアジア女性にとって、厚い壁にあいた風穴のようなものであった。その存在は今まで日本ではほとんど知られていないが、戦前の女子教育史上に正当に位置付けられる必要があると思われる。

創設者、レヴィ・ルイス・バーバーは1865年にミシガン大学法律大学院を修了後、デトロイトで弁護士として活躍し、デトロイトの不動産開発で財をなした人物であった。バーバーはパブリック・サービスと社会慈善に熱心で、デトロイト市の公園事業、公立学校制度改革、社会事業協会設立、ミシガン州の牢獄改善に携わり、ついで母校ミシガン大学評議員に任命された。そしてバーバーは母校に3つの大きな寄付を行った——女子学生のためのバーバー体育館（1894年）、女子学生寮ベッツィー・バーバー・ハウス（1920年）、そしてアジア女性のためのバーバー奨学金（1917年）である。いずれも当時ミシガン大学に欠けていた女子学生の支援対策であった。最初的女子学生部長の任命にもバーバーは貢献した²⁶⁾。

バーバー奨学金を創設したきっかけは、アジアで活躍する女性医師との出会いにあった。バーバーは1912年、世界1周の旅に出て、極東アジアを広く訪問し、ミシガン大学出身者の3人の女医たちに出会ったのである。2人は中国で医療宣教師として働いていたアメリカ人女性、メアリー・ストーンとアイダ・カーンで、もう一人は1901年にミシガン大学医学部を卒業した日本人女性の井上トモであった。ミシガンで教育を受けてアジアで貢献する彼女たちの働きぶりに深く感動したバーバーは、帰国すると1914年、2人の日本人女子学生のスポンサーとなってミシガン大学に留学させた。2人は英語力も大学入学の準備も不十分であったので、デトロイトのバーバー邸に数ヶ月間滞在し、家庭教師をつけてもらって受験勉強をし、1915年9月に医学部予科に入学した。

ところが、そのうちの1人菊地マツは結核に罹り、1916年帰国。まもなく死亡した。この経験から、バーバーはキャンパスの女子学生の生活状況を調査したところ、設備が不十分であることを知った。そこで1917年バーバーは女子学生寮の必要を満たすための寄付を申し出た。彼の母親の名をとった女子学生寮ベッツィー・バーバー・ハウスは、第1次世界大戦のために建設がおくられたが、1920年に総工費20万ドルをかけて竣工した²⁷⁾。

もう1人の貞方亀代は、1918年医学部に進学する。しかし語学の障害があったのであろう、成績が低迷。ある学期には、Cが2つ、C-が2つ、Dが4つ、Eが1つ、という有様であった。し

かし忍耐と初志貫徹の決意で頑張り貫き、7年後の1925年、待望の医師資格を取得。帰国後、国際聖路加病院で活躍した。臆病な日本人少女が、立派な小児科医に変身する様は、バーバー奨学金の象徴となった²⁸⁾。

公式には、アジア女性のためのバーバー奨学金は、1917年バーバーがミシガン大学に寄付した基金（総計70万ドル）によって創設された。各留学生には、渡米する旅費は支給されなかったが、学費のほかに生活費として年800ドルが支給された。1925年当時の学生の生活費は9ヶ月で700ドルほどと算出されており、ほぼ十分の奨学金だったと言える²⁹⁾。毎年10人近くが中国、日本、インド、フィリピン、インドネシア、朝鮮などアジア各地から、人種、国籍、宗教にかかわらず選ばれたので、ミシガン大学には常に20人近いアジア人女子学生がいた。上代が留学した1924年度 of the バーバー学生は総数25人で、日本人は6人であった³⁰⁾。バーバー奨学金設立の契機がアジアで活躍する女医との出会いにあったことから、特に医学教育に力が入られたようで、医学を修めてアジアに戻った女性たちが多いことがこの奨学金の特徴である。戦前の留学生約200人の内、25人が医師になった。18人が中国人で、日本人は3人である³¹⁾。

最初の10年間にこの奨学金を授与された学生総数は64人で、内訳は中国人36人、日本人17人、インド人6人、フィリピン人2人、インドネシア人1人、朝鮮人1人、不明1人となっている³²⁾。初めは学部への入学が多かったが、10年後になると、アジアにおける女子教育のレベル向上によって、過半数が大学院への留学生となった³³⁾。25年後になると、さらにレベルが上がり、過半数が博士課程の学生になった。戦前のバーバー奨学生に与えられた200の学位のうち、半数以上が修士で、博士が4分の1以上を占めた³⁴⁾。

日本人留学生については、特殊な状況があった。最初の数年間は、中国と日本からほぼ同数の留学生が推薦されてきた。ところが、日本から適切な候補者が見つからなくなるのである。バーバー奨学金委員会はこのことを憂慮し、理由を探り、候補者を得るために、1926年、W・カール・ルーファスを日本に派遣した。2つの原因が報告された。第1には、アジア女性の教育レベルの向上にともない、バーバー奨学金がだんだん大学院生を対象とするようになったのに、日本では女子の正規の大学教育が阻害されており、専門学校である女子大学校はアメリカの短期大学のレベルにとどまっていたこと。第2に、日本では女性はいわゆる結婚適齢期に留学することになり、帰国すると「特殊」な存在になるため、大学院留学を希望あるいは推薦することをためらうことになったことである。ルーファスは日本を訪問した際、東京帝国大学の小佐井学長と面会し、候補者の推薦を依頼した。小佐井は東京帝大では女子の聴講生が認められるようになったので、その中から候補者を推薦できるかもしれないと述べたが、結局一人も推薦されることがなかった³⁵⁾。中畠邦が述べるように、「大正期を通じて[日本の]女子教育政策は良妻賢母主義の教育論が大勢を支配し、女子教育のレベルアップの運動も法的に規定されることなく成果があらわず、」高等教育は専門学校のレベルを脱出できずに終わった³⁶⁾。

特にこの奨学金の創設のきっかけが日本女性の活躍にあったので、バーバー委員会にとっては日本人留学生の減少は残念なことであった。それを聞き知った新渡戸が、上代に声をかけたのである。すなわち上代のミシガン大学留学は、レヴィ・ルイス・バーバーや新渡戸稲造のような女子教育推進者の恩恵の結果であるとともに、大正末期の日本の女子高等教育の閉塞状態—留学の機会があっても若い女性志願者を生み出せない—の産物ともいえるのである。

1932年までの留学生総数は114人で、中国人47%、日本人26%、インド人12%、フィリピン人5%であった³⁷⁾。1941年までには合計212人に奨学金が与えられたが、この内、約半数が中国人で、日本人は20%とさらに比率を落とした。インド人とフィリピン人と朝鮮人がそのあとに続いた（戦争中も継続され、10人に授与され、戦後は1957年までに79人に授与された）³⁸⁾。

女性の高等教育が制限されていた戦前のアジアでは、このプログラムは特殊な位置を占めていた。アメリカで教育を受けた女性たちは祖国に戻り、現在では考えられないほどに注目され、大きく社会に貢献した。ルーファスが述べるように、「レヴィ・バーバーはまさしく19世紀の人物であった。進歩を疑わず、人類が問題解決の能力をもっていることを確信していた。…彼は高等教育を通して進歩が実現すると考え、高等教育がどんどん普及することを驚くべき正確さで予言していた」³⁹⁾。競争の激しい現代では考えられないことであるが、創設者バーバーの寛大な方針で、この奨学金では学位を終わるまでは奨学金が継続されたので、数年がかりで修士課程を修めることもでき、博士課程に進学希望するものにはさらに奨学金が継続された⁴⁰⁾。年限を区切ることなく、アジア人女性の潜在能力を最大限引き出そうという奨学金であった。英語が不得手のアジアからの留学生にとって非常に配慮の行き届いた奨学金であったと言えよう。もし上代が何年かかっても博士号を取得する覚悟で臨んだのであれば、それも可能だったであろう。また新渡戸はそれを期待していた。

2-2 ミシガンでの研究

上代は、大正13年にミシガン大学に向けて出発をしたときの気持ちを次のように述べている。「私は日本を発ちましたのは9月の、丁度震災の1年目でありました。学校の前を通りまして、講堂の煉瓦が壊れたまんまになってゐる地震の影響の著しいのをみまして、出て行くのがすまないやうな気のいたしましたことを、はっきり覚えてをります。」と⁴¹⁾。横浜からホノルル経由でサンフランシスコに上陸し、さらに知人をボストンに訪ねてからミシガンに到着した。上代はこのとき38歳であった。

ミシガン大学では、最初は大学のキャンパスに近い民家に下宿した⁴²⁾。1924年当時、女子学生のための寮はベッツィー・バーバー・ハウスを含めて5棟あったがまだ充分ではなく、順番待ちの状態であった⁴³⁾。その後、キャンパス内の女子寮のひとつ、118名収容で4階建てのマーサ・クック・ハウスに移ったようで、ミシガン大学の出版物*Michiganensian*の“Martha Cook Dormitory”の名簿に上代タノの名前がある。当時の日本人女性のバーバー奨学生は6人で、上代以外には、大阪出身の川村ヨウ、京都出身のキナイフミ、新潟出身の佐藤トキ、東京のショハラヒデと田中ヤエである（名前の日本語表記は不明）。その他に医学博士の資格を取ったばかりの貞方亀代が、病院視察のために残っていた⁴⁴⁾。*Michiganensian*の“Nippon Club”の名簿によると、上記のバーバー奨学金関係女子学生7人のほか、もう1人の女子学生がいたことがわかる。男子学生は24人であった。

ミシガン大学大学院における学問のレベルは高かった。上代はその印象を、「生徒の態度もずっと研究的であり、所謂アメリカ式大学の大ざっぱな風とは大分違ってゐるやうに感じました。中で面白いと思ひました事は教授方の論文の発表会に研究科の学生も出席するといふ事です」と述べている⁴⁵⁾。院生と教授が意見を戦わす状況に強い印象を与えられたようである。

ミシガン大学では、上代はイギリスのロマン主義詩人の研究と共に、アメリカ文学の勉強に力点を置いていた。上代自身が、「私は再びアメリカへ渡り、ミシガン州アン・アーバーのミシガン大学大学院で、アメリカ文学を中心に学びました」と述べている⁴⁶⁾。日本女子大学校でアメリカ文学、アメリカ文学史を講じていた上代は、本格的に勉強する必要を覚えていたのであろう。ミシガン留学の最大の成果は、このアメリカ文学の研究であったと思われる。

ミシガン大学にも上代の成績記録が残されている。記録は“Jodai, Tano: Tokyo, Japan. AB. Japan Women's College, 1910. M.A. Wells College, 1917. Admitted to Graduate School: Fall, 1924. Department of Specialization: English”となっており、1年間に上代が履修した科目がリストされている。上代は立派な成績を残している。科目内容についても、ウェルズ・カレッジの時と同様に、1924年度の履修便覧*University of Michigan: Graduate School: Announcement of Studies*によって概要を知ることができる。

2-3 大西洋を渡ってケンブリッジへ

博士号を視野に留学したのであるが、しかし上代は1年でミシガンを去る。すでに日本女子大学校で重要な役割を演じ始めていた上代は、何年かかるかわからない博士号取得に挑戦することに躊躇を覚えたのではないと思われる。また、イギリス文学を学ぶ者として、イギリスに行きたいという希望も抱いていたであろう。比較的早い段階で、1年でミシガンを去り、2年目にはイギリスに渡ることを考えていたようである。そして日本女子大学校の恩師であり、当時は同僚であったケンブリッジ大学出身のE. B. フィリップスの労によって、上代は2年目をイギリスに渡りケンブリッジ大学のニューナム・カレッジで学ぶ手はずが整った。

この方向転換を、実際には、ミシガンにおける秋学期が終了した頃にはすでに決めていたらしい。2年目の奨学金を継続するためには2月初めまでに申請しなければならないのに、それを断っている。ただし2月段階では、ニューナムからの受け入れ了承の返事はまだだったようで、1925年2月17日に開催されたバーバー奨学金委員会の記録によれば、「25人のバーバー奨学生のうち6人が、本年をもって当大学における予定された課程を終了する計画であることが発表された。…これらの学生は全員が帰国後に教育に携わるつもりである。ただしルス・チェンと上代タノの次年度の計画は不確定である。残りの人は夏に中国に戻るつもりである。」残りの19人の奨学金は次年度継続が決定した⁴⁷⁾。

上代は最後まで博士号の取得に関しては迷っていたような気配がある。ミシガン大学からは強く引き止められたらしく、上代は、「1年ほど[ミシガンに]ゐて、イギリスに向ふ決心を致しました。引止められもしましたし、名残も惜しかったのですが出立致しました」と回想している⁴⁸⁾。ミシガン大学大学院において1年間の勉強を終わったあと、「夏ハーバード大学のサマースクールに参加」⁴⁹⁾することにした上代は、ミシガンを去り、ボストンに向かう途中、ニューヨーク州のウェルズ・カレッジにかつての恩師・友人を訪問し、博士号に関する迷いについて相談しているのである。上代が語るところによると、「さらに本格的に勉強しようとかつての留学先で親しい友人、教授がいるウェルズ・カレッジに相談におもむいたところ、博士号の学位をとることだけに勉強のポイントをおかずに、実力をつけることに専念すべきだとしてイギリス留学を強く勧められた」という⁵⁰⁾。上代にこのアドバイスを与えたのは、かつての修士論文指導教官で

あったキャサリン・キーラーであった。キーラー自身も40歳過ぎてからケンブリッジに留学し、イギリスで博士号取得に時間をかけるか、学生指導に必要な勉強に専念して教育現場に復帰すべきか迷った経験があった。キーラーは後者を選択し、それを後悔していないことを上代に告げた。上代は、イギリスで1年間勉強してからミシガンに戻り、取得単位をミシガン大学にトランスファーして、博士号取得につなげる可能性についてもキーラーに相談している。キーラーは、大学の仕組みの違いからそれは困難であると告げ、上代は博士号取得を最終的に断念した⁵¹⁾。最後の最後まで迷っていたことがうかがえるが、上代は自分のために学位を取得することより、日本で待つ学生たちの教育を優先する決意をしたのである。

上代は1925年9月ニューヨークから船出した。8月28日、桜楓会紐育支部では上代を迎えて会食をしたことが写真付きで『家庭週報』に掲載されている⁵²⁾。大西洋横断の船旅はあまり順風でなかったらしく、帰国後の報告の中で上代は、次のように述べている。「イギリスへの出発には、ずいぶんあわてた乗り方をして、出帆の30分前になっても、まだ荷物が来ない始末でした。…マジスティックといふ船の3等に乗ったのですが、あの5日間はよい経験にはなりましたが、併し、もう一度繰り返したいとは思ひません」と⁵³⁾。

2-4 ケンブリッジにおける上代

イギリスにおける上代は、正規の学生としてではなく、研究生の待遇で授業を聴講した。「ことに有能なチューターの下で、イギリス批評文学の勉強をしました」と回想している⁵⁴⁾。上代の語るところによると、「ニウナンには4つのホール〔寮〕があって、1人のチューターは、60人位を受け持てをります。まあ当校の指導者、寮監といふ工合でそれに研究方面の指導が加ってゐるといふようなものであります。…学生は1学期の始めに、どのレクチュアにも責任なしに出席出来ます。その間に各レクチュアの見当をつけ、1週4時間、2時間、3時間と時間を極めるのでありますが…私は1週34時間とてをりました。」またアメリカとイギリスの講義の違いについては、「一言に言へば、イギリスでは勝手なことを言ふといふ感じがします。…アメリカでは、〔学生は〕どうしても〔授業に〕出なくてはならない、〔教員は〕其コースには責任を持つといふ風があります」と述べている⁵⁵⁾。

上代は1年の留学を終えて1926年6月10日にケンブリッジを立ち、湖沼地方に文学史蹟を訪ね、スコットランドを経て、アイルランドに渡り、7月8日から15日までダブリン市で開催された国際婦人自由平和連盟(WILPF)総会に日本婦人平和協会を代表して出席し、初めて日本支部としての報告をおこなった。その後スイスに渡り、ジュネーブで国際連盟事務次長であった新渡戸宅に身を寄せて半年間滞在した。その間、国際連盟の図書館で国際関係論や平和論を学び、しばしば国際連盟の会議にオブザーバーとして出席し、国際連盟に準代表として女性が送りこまれていることを目撃し、またジェーン・アダムズらと交流の機会を得た⁵⁶⁾。後年上代は、「国際連盟はなやかな時で、多くの世界の偉い人たちにおめにかかることができました。この人たちに接して、それが或る意味で本当に平和の問題がわかりかけた時であったと思います。世界の問題を世界の人たちみんなで考えるということが、この人たちと接して人間の魂にふれることによってわかってきたと云えましょうか」とふりかえっている⁵⁷⁾。上代にとってこのスイスでの半年間は、敬愛する新渡戸夫妻のもとで平和問題に関する理解を深める貴重な機会となった。世界的な見聞を

得て、翌1927年3月、国連事務次長の任期を終えて帰国する新渡戸夫妻と共に帰国の途についた。

2-5 国際化と戦争

1927年3月、上代は2年半にわたった米英の留学から帰国し、英文学部長の任についた。教壇に復帰した上代は、引き続きアメリカ文学史を担当した。その授業は詩を中心にした独特のものであったらしい。『英文学科70年史』によると、「英文学部長の上代先生の授業は特筆すべきもので、米文学史というよりは、米詩史とも言うべき性質のもので、社会的背景や事情を踏まえての講義に、学生たちは詩に対して忘れられない愛情を抱くようになった。20世紀に入ってから新しい米詩を学んで、胸をはずませる思いをしたものだ」と書かれている⁵⁸⁾。

前回の留学と同様、上代は颯爽とした姿勢で学生を魅了したようだ。国文学部27回生の白鳥喜代は次のように回想している。「上代タノ先生…の印象は今でも強く残っております。学生の憧れの的でしたから。あの日、先生は講堂から築山を通して、校庭を颯爽と下りてこられたのを目の当たりにしまして、私はそのお姿や歩き方に見とれてしまいました。留学から帰られたときでしたからワンピースの色まで覚えております。それはシックなグリーン、そして胸に大玉のヒスイの、ながいネックレスをつけられて。素的な先生でした」と⁵⁹⁾。留学から戻った上代は、ハイカラなお洒落にもさらに磨きをかけ、女子学生のロール・モデルとして颯爽と目白で活躍したようである。

また当時の日本女子大学校は文部省の認可を受けた総合大学化にむけて最大の山場を迎えており、1927年5月31日には、待望の総合大学の予科として高等学部が開校された⁶⁰⁾。上代が担当した必須科目は、「近代アメリカ文学」と「1870年以降の英文学批評」の2科目であった⁶¹⁾。高等学部第2回生の長沢ふさは当時を回想して、「女子大時代超一流の先生方に巡り合ったことを後に思い起こすと、なぜ講義をしっかりと聞いておかなかったのか悔やまれます。アメリカから帰っていらしたばかりの上代タノ先生にも習いました。あの方は真っ直ぐな、情熱的な方でした。学生の指導もその人の特質と将来を見越してされ、翻訳の仕事を与えられてそれが生涯の仕事となった人もいます」と述べている⁶²⁾。(3年後の昭和5年、いよいよ大学本科が開始した。初年度の入学者は文科38名、理科19名であった。残念ながら、文部省認可の大学を設置するという願いはかなえられず、本科は4年で廃止となった。)

ジュネーブでの新渡戸宅に滞在して国際連盟の活動をじかに経験して帰国した上代は、以前にもまして教育の中で国際連盟を強調した。1927年に帰国するや、日本女子大学校の学生全体で国際連盟協会学生支部をつくり、学内に国際連盟係を設けた。英文学部29回生の中村尚子は、回想のなかで、国際連盟係に言及している。「…クラスは一年の時は七十人、二、三年たつと結婚でやめる人が多くて、しまいには三十五人くらいのクラスになりました。係があって私は趣味係、政治係、生意気にも国際連盟係でした。上代先生が国際問題に力を入れていらして、外国の勉強をしたり、時にはドイツ・イタリー・フランスなど各国の女性が女子大にいらしたことがあります。…上代先生はアメリカ帰りで素的でみんな懂れていましたが、一寸怖くてちゃんと勉強してこないと厳しく注意されました」と⁶³⁾。学生たちはその後もずっと世界平和への貢献、人類愛精神の涵養、国際知識の徹底を目標に積極的に活動を続けた。1933年3月に日本が国際連盟を脱退した後は、国際連盟係は国際協会学生支部係と名称を変更したが、国際親善活動は盛んに行い、同年

「11月には上代先生の母校ウェルズ・カレッジに日本人形を贈った。」⁶⁴⁾

1937年には、上代は学生が国際的視野を持つことの重要性を考えて、正式に「時事英語」の科目を設置し、篠崎茂穂を担当者として招いた。篠崎は、その時の事情を次のように回顧している。

昭和12年4月、女子大の教授に就任し、当初は高等女学校の英語と英文科の時事英語を担当した。上代先生に案内されて、校長室で井上秀校長に紹介されたが、その時、上代先生から時事英語を新設科目とする必要についての説明があった。…英文科は英文学に重点をおくあまり、時事英語に弱点があった。英語の一般の普及が国際情勢等から必要に迫られている時、この事に強い関心を持つべきことは当然であった。…わが校は良妻賢母を養成するところと世間に思われていたように、教育の中心は家政学で、何となく家庭、ひいては日本国家の為になる女性を教育の対象とする傾向があった。そこで、先生は、英文科は国際的視野からの教育を行うべきであると痛感され、学生の関心を時事問題に向けさせて、その理解を深めさせ度いと考えられたのである。⁶⁵⁾

1937年は、国際関係が緊迫化し、日中戦争勃発の年にあたる。ミシガン、ケンブリッジ留学から戻った上代は、学生の視野を広く世界に向ける必要を痛感し、その手段として時事英語を正規の授業科目にしたのであろう。授業やカリキュラム改革に力を入れていた様子がみてとれる。

第二次世界大戦期について短く触れておきたい。上代は英文学部長として英文学科を守り導くという大役を果たしたが、その際にも上代の国際性が発揮された。すなわち上代の留学の経験が、その判断力に大きく貢献していた。『名誉都民小伝』によると、戦争が勃発したとき、「海外生活の経験豊かな上代さんは、それぞれの国の国力の違いなどを知っていたので、今度の戦争は無謀な戦いだと感じていた」⁶⁶⁾。そして学生が勤労動員されて、学生を軍需工場へ引率したときにも、工場の昼休みと仕事後の1時間、上代は堂々と英語を教え続けた。担当将校たちは中止を申し入れたが、「日本は今戦いに勝つため一生懸命であるが、戦争が終われば必ず相手国との交渉があり、将来は仲良くしてゆかねばならない。そういう時に敵を知らないで何が出来るか、戦争が終っても、米英がこの地上から滅亡してしまわない限り、英語が無用になる日が来ようとは思われない」と、彼等と渡り合ったという⁶⁷⁾。『名誉都民小伝』が言うように、「いまで思うと大の男でもなかなかいえないことを、血気にはやる将校相手によくもいったものだ」という感じが強くするが、やはり海外での留学生活を送ってきた経験が、相手に気合い負けしない度胸と外国事情を話してきかせるだけの余裕を生み出したのだろう⁶⁸⁾。こういう上代に対し、学生は忘れられない感謝の念を抱いた。42回生の小木曾美代は、具体的な例をあげ「戦争中、上代先生の英断に守られた」と回顧している。

或る日、軍事情報局から若い将校が来校され、全校生に講演された。内容は、国の存亡の機に当って、女子学生と雖も男子と共に戦うべきで、直ちに学園を去って軍需工場へ赴くべきという趣旨であった。これに応じ、学生の中には明日からでも工場へ行こうという声がわき上り、学部討論会を持つことになった。学園を去って戦うべきか、国が許す最後の瞬間まで学生として勉強すべきか。この2つについて真剣に考えた結果、英文科は後者にまとり、上代先

上代タノの米英留学

生に報告したところ、正しい結論であると認められた。当時、各学部にもモットーがあり、国文科は「七生報国」英文科は「若さと祖国へ」であった。軍国主義で塗りつぶされた激しい雰囲気の中で、後者を選択するだけでも容易でなく、上代先生の励ましが如何に我々を支えていたか察して頂きたい。⁶⁹⁾

その他にも、英文学科の学生の動員先としてまず赤十字を選んで、学生を守ってくれたことや、「日本の無計画な軍事行動が破綻をきたすのは必至であると解り易く話して下さった。」ことなどが挙げられている⁷⁰⁾。

おわりに

上代が2度目の留学から帰国した昭和初期の日本の女子高等教育の状況は、ほぼ女子高等師範学校・専門学校のみの状況であり、その卒業生も女子人口の約4パーセントに過ぎなかった⁷¹⁾。当時、女子大学創設に向けた運動が高まりをみせ、1927年に日本女子大学校にも大学予科として高等学部が、また1930年には大学本科が設置されたが、この努力も数年で途絶えた。戦前の日本では女子大学創設は実現することなく終り、中畠が論じるように、「向学心に燃える者は女子学生の入学や聴講を許す男子系大学に進学したが、多数の男子学生の中に女子が入って勉学するには様々の困難をともなった。このような日本の現状に欧米留学の道をとった者もある。しかしこれらの人々は恵まれた極く僅かな例外的存在であった」⁷²⁾。

上代は留学の道を選び、それを許された例外的存在であった。上代の教育者としての経歴は、留学をぬきにして考えることはできない。特に英米文学を志す研究者にとって、当時の日本の女子高等教育の閉塞状態を突破するには、ほぼ留学という道しかなかった。ミシガン大学のパーバー奨学金が果たした役割が示すように、日本においては女性が大学院教育を受けることは困難を極めたのであり、成瀬、新渡戸やレヴィ・パーバーのような、女性リーダーの育成に熱意のある教育者、パトロンにめぐり合うことが、人生の道を左右することになったのである。

上代の留学が日本女子大学校に与えた影響には大きなものがある。上代は1910年から1965年までの55年間に及ぶ長期にわたって日本女子大学そして英文学科を指導したが、その貢献は、留学や海外視察等によって培われた国際性をぬきにして考えることはできない。上代の授業、訓育を受けた学生たちは一人残らず世界に視野を開く必要性というメッセージを心に受けとめて卒業していったといっても過言ではない。上代を通して、世界に活躍する女性の存在にふれ、学生たちは新しい女性観をもって社会にでていくことにもなった。まだまだ国際化されていなかった戦前の日本社会にあって、上代は学生たちに世界に目を向けることの重要性を教え、身をもって新しい女性像を提示し、ロールモデルの役割を果たしたのである。

注

- 1) この小論は、2000年度の総合研究所の研究課題として採択された「成瀬仁蔵の女子教育——初期日本女子大学校卒業生のアメリカ留学と国際交流にみる」の成果の一部であり、『総合研究所紀要』第5

号(2002)に、簡略な報告が掲載されている。また上代タノの教育者としての足跡を辿った「若き日の上代タノにみる明治期の女子教育——その展開と限界——」(日本女子大学紀要文学部第53号、2004年)および「上代タノと新渡戸稲造——上代タノ書簡を中心に(『成瀬記念館』第13号、1997年)の続編である。

- 2) 日本女子大学女子教育研究所『女子の高等教育』(ぎょうせい、1987)、35-6頁。
- 3) 上代は戦後1949年にも2月から8月にかけてアメリカに留学している。このときはスミス・カレッジとコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで、大学経営等について学んだ。Tano Jodai, "A Brief Account of My Life." July 8, 1967. Wells College Archives.
- 4) 日本女子大学英文学科『日本女子大学英文学科七十年史』(日本女子大学英文学科七十年史編集委員会、1976年)、19頁。
- 5) 東京都「上代タノ先生」『名誉都民小伝』、(東京都生活文化局コミュニティ文化部、昭和57年)、93頁。
- 6) 参照：上記島田「上代タノと新渡戸稲造」
- 7) 日本女子大学英文学科『七十年史』、19頁。
- 8) 東京都「上代タノ先生」『名誉都民小伝』、96頁。
- 9) "Tano Jodai, '17: President, Japan Women's University, Tokyo," *Alumnae News*, Oct. 1956, pp. 9-10. Wells College Archives.
- 10) 日本女子大学英文学科『七十年史』、37頁。
- 11) 日本女子大学英文学科『七十年史』、46頁。
- 12) 日本女子大学英文学科『七十年史』、19頁。
- 13) 『家庭週報』435号、1917年9月28日。
- 14) 『家庭週報』473号、1918年6月28日。
- 15) "An Honor Shared," *Alumnae News*, Summer, 1962. Wells College Archives.
- 16) Jodai, "A Brief Account of My Life."
- 17) 日本女子大学英文学科『七十年史』、127-8頁。
- 18) Rosamond H. Clark, "Final Report of Wells College Nisei Scholarship Fund: Tano Jodai Scholarship Fund," June 6, 1946. Wells College Archives.
- 19) "Grateful Messages from Japan: From T. Jodai," letters dated May 28, Oct. 30, Oct. 31, Nov. 1, Nov. 3, Nov. 11, Nov. 20 of 1946. Wells College Archives.
- 20) "Tano Jodai, '17," *Alumnae News*, Oct. 1956, pp. 9-10.
- 21) 留学は婦人国際平和自由連盟(WILPF)への出席と演説、ジェーン・アダムズとの出会い、ジュネーブにおける新渡戸夫妻との生活、国際連盟における直接的経験、クエーカー信徒となる決意等、平和主義者としての上代に多大な影響を与えた。しかしこの論考は教育者としての上代に焦点をあわせており、平和主義者としての上代に関する考察は最小限にとどめている。
- 22) "Tano Jodai, '17." *Alumnae News*, Oct. 1956.
- 23) "Wells College Accepts JWU Proposal of Sisterly Relationship," *The Mejiro Tattler*, vol. 2, no. 8, Dec., 1957; "Wells Has a Sister College: Japan Women's University, Tokyo," *Alumnae News*, spring, 1958, pp. 4-7. Wells College Archives.
- 24) "Wells-Japan Lectures Bring Mahler: Jodai Suggests Wells-Japan Lectures," *Grapevine*, March 20, 1958, p. 4. Wells College Archives.
- 25) 東京都「上代タノ先生」『東京都民小伝』、99頁。
- 26) Ruth B. Bordin, "Levi Lewis Barbour—Benefactor of University of Michigan Women," *Michigan Quarterly Review*, II, 1963, pp. 36-38. Bentley Historical Library, University of Michigan.
- 27) Ibid., p. 38.

上代タノの米英留学

- 28) W. Carl Rufus, "Twenty-five Years of the Barbour Scholarship," *Michigan Quarterly Review*, u. d., pp. 15, 17. Bentley Historical Library, University of Michigan.
- 29) "The Levi L. Barbour Scholarships for Oriental Women," *University of Michigan Bulletin*, June 12, 1926, p. 8. Bentley Historical Library, University of Michigan.
- 30) "Minutes of the Meeting of the Executive Committee of the Committee in Charge of the Barbour Scholarships," Oct. 3, 1924. Bentley Historical Library, University of Michigan.
- 31) Rufus, "Twenty-five Years of the Barbour Scholarship," p. 24.
- 32) "The Levi L. Barbour Scholarships for Oriental Women," pp. 10-11.
- 33) Rufus, "Twenty-five Years of the Barbour Scholarship," p. 15.
- 34) Ibid., p. 26.
- 35) Ibid., p. 18.
- 36) 日本女子大学女子教育研究所『大正の女子教育』（国土社、1975）、42頁。
- 37) "Barbour Scholarships," *University of Michigan Official Publication*, September 14, 1932, pp.11-15. Bentley Historical Library, University of Michigan.
- 38) Rufus, "Twenty-five Years of the Barbour Scholarship," p. 18.
- 39) Ibid., pp. 39-40.
- 40) Frank L. Huntley, Secretary, "Eleven Years of the Barbour Scholarship (1946-57): A Report to the President and Committee," Aug. 1, 1957, p. 2. Bentley Historical Library, University of Michigan.
- 41) 『家庭週報』890号、1927年5月27日。
- 42) "1924-1925 University of Michigan Official Students' Directory" によると、上代の住所はキャンパスに近い546 Walnutとなっている。
- 43) "The Levi L. Barbour Scholarships for Oriental Women," p. 7.
- 44) "Minutes of Barbour Scholarship Committee," Apr. 7, 1925. Bentley Historical Library, University of Michigan.
- 45) 『家庭週報』890号。
- 46) Jodai, "A Brief Account of My Life."
- 47) "Minutes of the Meeting of the Barbour Scholarship Committee," Feb. 17, 1925.
- 48) 『家庭週報』890号。
- 49) Jodai, "A Brief Account of My Life."
- 50) 東京都「上代タノ先生」『名誉都民小伝』、99頁。
- 51) A Letter from Katherine Keeler to Tano Jodai, August 10, 1925. 成瀬記念館蔵。
- 52) 『家庭週報』822号、1926年1月1日。
- 53) 『家庭週報』890号。
- 54) Jodai, "A Brief Account of My Life."
- 55) 『家庭週報』890号。
- 56) 『家庭週報』858号、1926年9月24日；887号、1927年5月6日；888号、1927年5月13日。
- 57) 石川むめ「上代先生インタビュー」（手稿、東京、1965年3月22日）。成瀬記念館蔵。
- 58) 日本女子大学英文学科『七十年史』、45頁。
- 59) 聞きがきの会『先輩に聞く』（聞きがきの会編集、1999年）、74頁。
- 60) 日本女子大学英文学科『七十年史』、24頁。
- 61) 同上。
- 62) 聞きがきの会『先輩に聞く』、97頁。
- 63) 聞きがきの会『先輩に聞く』、114-5頁。
- 64) 日本女子大学英文学科『七十年史』、40頁。

- 65) 日本女子大学英文学科『七十年史』、46頁。
- 66) 東京都「上代タノ先生」『名誉都民小伝』、100頁。
- 67) 日本女子大学英文学科『七十年史』、54-5頁。
- 68) 東京都「上代タノ先生」『名誉都民小伝』、101頁。
- 69) 日本女子大学英文学科『七十年史』、55-6頁。
- 70) 同上。
- 71) 日本女子大学女子教育研究所『女子の高等教育』、37頁。
- 72) 日本女子大学女子教育研究所『大正の女子教育』、37頁。